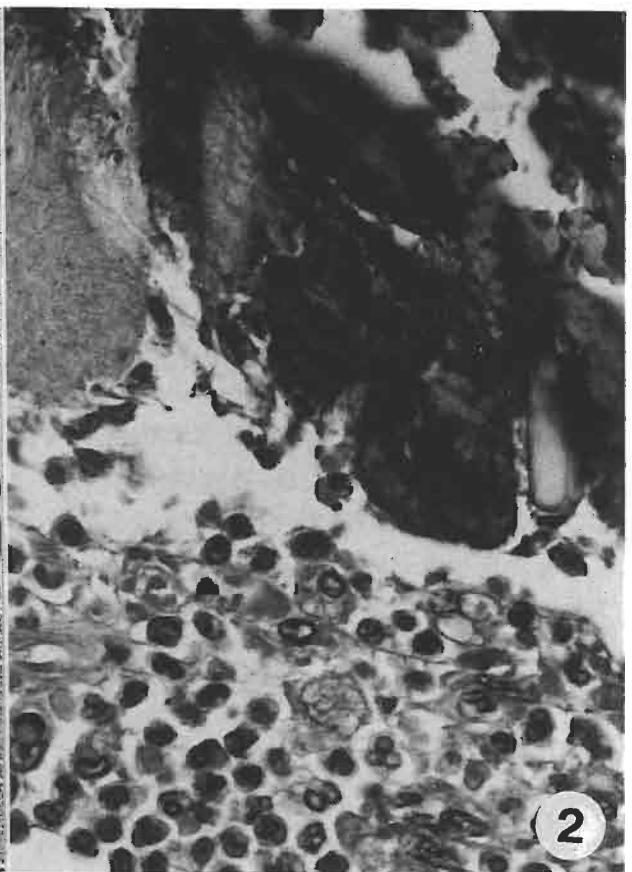


犬の骨盤腔内腫瘍

大阪府立大学農学部獣医病理学教室出題 第33回獣医病理学研修会標本No.587



動物：犬，雑種，雌，3年4ヵ月齢。

臨床事項：[既往歴] 約2年前に子宮・卵巣の切除術を受けた。[現症] 元気・食欲がなくなったという稟告でF動物病院に上診された。腹部の触診，X線，超音波検査で腹腔後部に5cm大の実質性の腫瘍形成と左右水腎症が認められた。試験的開腹で，膀胱背側に5cm大の腫瘍形成のほか，それに癒着した大網などに小腫瘍が多発していた。腫瘍全部の摘出は不可能と判断され，畜主の希望もあり安楽死の処置がとられた。

剖検所見：(1) 膀胱と直腸の間に6.5×4.5×7cm大の硬い腫瘍を形成していた。腫瘍は膀胱，直腸，腔(盲端)に膠着し，大網，腸間膜，小腸が癒着していた。剖面は灰褐色ないし灰白色で結合組織に富み，黄褐色の微細膿瘍が多発していた。(2) 右卵巣位に3×3×2.5cm大の(1)と同様の腫瘍を形成。大網にも1～3mmの小腫瘍が播種性に多発。(3) 左右両側性水腎症；左腎，高度。右腎，中等度。(4) 犬糸状虫症，中等度。(5) 卵巣・子宮摘出の状態。

微生物学的所見：本学微生物学教室で実施された病巣部の微生物学的検査で*Nocardia asteroides*が純培養の状態で見出された。

病理組織学的所見：異物(縫合糸)を中心に化膿性

肉芽腫を形成していた(写真1，H&E染色，×71)。異物周囲には桿状あるいはフィラメント状の細菌が集落を形成し，それらを取り囲んで好中球，マクロファージの浸潤を認めた(写真2，写真1・Aの拡大，×710)。さらにその周囲には形質細胞の浸潤した結合組織の増殖が著しい。また，異物を含まない細菌集落を中心とする化膿性肉芽腫病巣が多数認められた。組織切片では，細菌はグラム陽性，抗酸菌染色で陰性であった。また種々な程度に石灰沈着し，ベルリン青反応，PAS反応に陽性を示した。提出標本以外に同腫瘍の各所から作製した切片及び右卵巣位の腫瘍，大網の病変も菌塊を中心とする化膿性肉芽腫性病変であったが，検索した範囲内では他の臓器には同種の病変はみられなかった。

考察：子宮・卵巣摘出手術後に骨盤腔内や鼠径部に膿瘍や肉芽腫の発生することが知られている。しかし縫合糸の見つかることは少ない。本例では大きい腫瘍の1箇所にも縫合糸が確認された。本病変は稟告と病変発現部位からみて，子宮・卵巣摘出術時の滅菌不十分な縫合糸と密接に関連していると考えられる。

病理組織学的診断：子宮・卵巣全摘出術時の縫合糸に起因するノカルジア症。